△教師なくして臨本を摸す時は、自己の眼は正しからざるもの故、其正否を見るには、光に透して裏面より見て臨本と比較する時は誤れる點を見出し得べし。

△臨畫中、畫板を上下左右に廻すことは避けざるべからず。夫故臨本を摸す場合には、左の上部より筆を着けて右の下隅に終るべきなり。かくする時は畫面の汚るることなかるべし。

△寫生の際は一部分より仕上げるといふ方法は不可なり。目的物より寫し始め、而して最後は尤も黑き陰影に終るべし。

（以上水彩畫講習所に於ける丸山健策氏講話の大要）

若しそれ正しく眞實ならんには畫家の職を要せず、蓋し撮影器は古今何れの畫家の手腕に比するも更に絶體的に完全なるものなればなり。藝術中には精細に比して更に或るものあり。繪畫にありては形體及線條に比して更に或るものあり。色彩はその一要素たり。活動これその一要素たり。生命、香氣、勢力、思想、感情、慾情等、皆これその問題中に入るべきものなり。而して最後にありては總て諸考案を聚めたるものに比して往々更に絶對なる天姿の英才獨特の筆法あり、ブレーク、ミカエル、アンジエロ、ミレー、コロー、ルソー、ドロヨンの諸氏はこの最後の性質を有するものにして、吾人その諸作の前に立つや殆と諸規律を放擲し單にその儘に滿足せんとするものなり。如斯はこれ規矩繩墨を脫却したるものにして、その初めは非難紛々たりと雖も遂にこれを規律として仰ぐに至る獨特の筆法にして聰敏の筆力たるなり。（繪畫鑑賞法の一節）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊